

カラス捕獲大作戦！！

～ドロップネットによる捕獲技術の実証～

浅井信吾（東三河農林水産事務所農業改良普及課）

【平成29年2月15日掲載】

【要約】

多くのカラスが集結する養鶏場の堆肥処理施設敷地内にカラス用ドロップネット（以下「ドロップネット」という。）を設置し、4回の操作で55羽を捕獲できた。捕獲後はドロップネットに集まるカラスが一時的に少なくなるものの、3日後には捕獲前と同程度が集まるようになった。従来のおとりを使った大型捕獲檻と比べて捕獲効率が高く、操作頻度を上げれば更に多くのカラスを捕獲できる。

養鶏場自体には直接的なカラス被害は無いものの、栄養価の高いエサが豊富にある状況が地域のカラスの個体数を増やす一因になっていると考えられるため、今後も捕獲を継続することが必要である。

1 はじめに

愛知県の2015年の野生鳥獣による被害額は、獣害が2億1600万円、鳥害が2億1100万円と、約半分が鳥害である。鳥害は、露地野菜と果樹栽培への被害比率が高く、5割以上がカラスによる。農作物への直接的被害はもとより、農家の精神的なダメージも大きく、都市部では生活被害も深刻である。このような状況の中、鳥害の防止対策が急務になっているが、具体的な対策は乏しく、畑にテグスを張ることや農作物をネットで覆うことしか確実な対策はない。

東三河地域では、養鶏場や養鶏場の堆肥処理施設などエサ場となるところにカラスが集まり、大群を形成している様子がみられ、被害を拡大する要因にもなり得ると考えられる。捕獲は箱わな（大型捕獲檻）によるものが多いが、おとりカラスの確保に手間がかかる割には捕獲実績が上がっていない。そこで、農業総合試験場がメーカーと共同開発した、カラスを効率的に捕獲できるドロップネットについて、現場における実証結果を紹介する。

2 ドロップネットについて

使用したドロップネットは、モニターを見ながら遠隔操作でネットを落としてカラスを捕獲するわなで、鳥獣被害防止都道府県活動支援事業の一環で2015年9月に豊川市大木町の大木養鶏組合に導入された。5m×5m×2.5mのサッカーゴールのようなフレームにネットを張って設置し、エサでカラスを誘引し、管理棟でモニターを見ながら、トリガーを動かしてカラスを捕獲するという仕組みである（図1、2）。

3 実証場所の選定について

実証場所として選んだ養鶏場は、周辺にカラスのねぐらとなる林が多く、堆肥処理施設などにカラスが集まりエサをあさるため、常に50羽近いカラスがいる。養鶏場に対する直接的な被害は無いが、周辺の田畑や果樹園を荒らす原因となったり、鶏への感染症の媒介などのリスクも高くなると推察された。また、養鶏場では商品化できない卵（破卵）が毎日ある程度発生す

るため、廃棄処分が必要であり、これを利用すればカラス誘引用のエサを安定的に入手することが可能であり、継続的な捕獲活動にも条件的に有利であった。

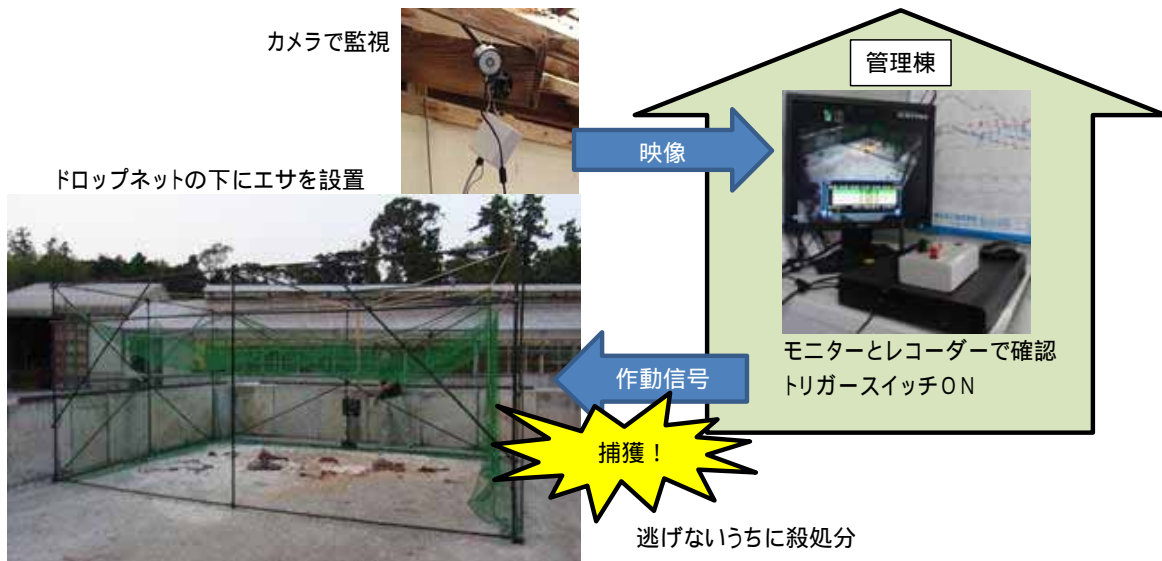


図1 ドロップネットのしくみ



図2 ドロップネットでカラスを捕獲する様子

4 捕獲技術の実証

養鶏組合員が破卵等の誘引エサの管理とドロップネットの操作を行い、一宮大木地区鳥獣被害防止会が捕獲したカラスの殺処分を行った。

表1 ドロップネットでカラスを捕獲した時の成功率

日付	捕獲時刻	捕獲直前の羽数 ⁽¹⁾	捕獲した羽数	捕獲成功率 (%)
10月22日	9:19	18	15	83.3
10月31日	9:40	22	6 ⁽²⁾	27.3
12月22日	8:27	28	25	89.3
1月5日	9:26	22	9	40.9

1 捕獲直前にドロップネットの下に侵入していたカラスの羽数のこと。

2 ネットが引っ掛かりスムーズに稼働しなかった。

設置以降の4か月間で4回操作させ、合計55羽を捕獲できた。いずれの捕獲も午前中のエサやり後のタイミングで行われた。2回目の捕獲では22羽がドロップネットに入っていたが、操作の際にネットがフレームに引っ掛かり、ネットが落ちるタイミングが遅れたため6羽のみの捕獲となった(表1)。捕獲実績をさらに上げていくためには、操作回数を増やす必要がある。一方、大量捕獲した後はカラスが敏感になっており、わな操作時の少しの物音で逃げてしまい、捕獲成功率が下がった一因となったため、スムーズに操作するよう改良を加えるとともに、ネットの奥までカラスが入るのを待って操作させるようにした。操作回数を増やすためには、20羽が入るのを待たず数羽でも捕獲していくと良いと考えられる。

また、記録映像を観察し、捕獲後、何日でカラスが戻ってくるかを調査した。毎日午前9時頃に養鶏組合員が破卵を置き、立ち去ってしばらくすると20羽近いカラスが集まる様子が見られた。捕獲直後は一時的にドロップネットに寄りつかなくなったが、翌日には内部への侵入は少ないものの、周囲には集まるようになり、3日後には捕獲前と同程度がネット下に集まった。

ドロップネットの性能や使用上の注意点をまとめた概要を表2に示した。

5 エサと被害の関係

誘引エサとして一宮大木地区鳥獣被害防止会が捕獲、解体したシカの残さ(背骨部分、内臓など)を置いたところ、破卵と同等以上の誘引効果があり、カラスの滞在時間は破卵を置いた場合よりも長かった。一方で、ミカンやカキを置いたところ、カラスが食べることはなく、誘引エサとして不適であった。

田植え時期から稲刈り後まで、養鶏場周辺の水田にはカラスが常にいるが、水稻への被害はあまりなかった。また、周辺にはナシやカキなど果樹園があるが、カラスが多い割に被害は少なかった。これは、養鶏場周辺のカラスは破卵など栄養価の高い食べ物に容易にありつけるため、農作物には嗜好が向いていないためと考えられる。しかし、カラスは1日に10km以上飛行してエサを探すとされており、養鶏場がある豊川市内はもとより、豊橋市や新城市にも飛来する可能性がある。周辺の農作物被害が少ないからといって養鶏場周辺のような状況をそのまま放置すると、良好な栄養状態のもとで個体数が増加し、この地域から離れた個体が広範囲で被害をもたらすおそれがある。したがって、このような多くの個体が集まる場所では、今後も継続して、積極的に捕獲を続けていくことが必要である。

表2 カラス用ドロップネットの概要

<p>わなの写真 大きさ (たて×よこ× 高さ)</p>	 <p>(豊川市大木町) 5.0×5.0×2.5m</p>												
<p>設置 おすすめ場所</p>	<p>カラスが常に集まってくる場所(養鶏場、畜舎、食肉センター等) モニターを置くことができる建物が付近にあること 誘引エサを供給しやすいこと</p>												
<p>おすすめ しない場所</p>	<p>カラスを呼び寄せると困る場所(畑地) 人からよく見える場所</p>												
<p>わなの使い方</p>	<p>誘引エサをネット下に置く。 管理棟のモニターからカメラで監視し、ネット下へのカラスの誘引 状況を確認する。 スイッチを押し、ドロップネットを稼働させ、カラスを捕獲する。 すぐに殺処分する。</p>												
<p>2015年の 捕獲実績</p>	<table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th>日付</th> <th>捕獲羽数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>10月22日</td> <td>15羽</td> </tr> <tr> <td>10月31日</td> <td>6羽</td> </tr> <tr> <td>12月22日</td> <td>25羽</td> </tr> <tr> <td>1月5日</td> <td>9羽</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>55羽</td> </tr> </tbody> </table> <p>9月4日に設置した。</p>	日付	捕獲羽数	10月22日	15羽	10月31日	6羽	12月22日	25羽	1月5日	9羽	合計	55羽
日付	捕獲羽数												
10月22日	15羽												
10月31日	6羽												
12月22日	25羽												
1月5日	9羽												
合計	55羽												
<p>捕獲のコツ</p>	<p>毎日、誘引エサを撒き、カラスにエサを撒きにくる人を覚えさせると警戒心が弱まる。 ネット下にたくさんのカラスが入るのを待たなくても、週1回5～10羽のペースで捕獲が可能。 果物や野菜よりも動物性のエサの方が誘引性が高い。 朝に食べにくることが多い。</p>												
<p>1基の価格</p>	<p>約50万円</p>												
<p>備考</p>	<p>捕獲直後は寄りつかなくなるが、3日後くらいから戻ってくる。 カラスが増える原因となるエサ場で捕獲することで、地域全体のカラスを減らす効果がある。</p>												